「ナバホの教え」第2弾

ネイティブアメリカンの居留地で30年以上描き続けてきた画家

福田ゆきさん(69)が伝える調和と感謝のメッセージ――

生きるために必要なものは「太陽、空気、水そして大地!」

アメリカ南西部の厳しい自然のなか、ネイティブアメリカンの生活にとけ込んで暮らしてきた画家の絵が人気を呼んでいる。いまの日本人が失ったシンプルなライフスタイルのなかで身につけたエネルギーと、癒しの力のルーツを探る。

■

「正直、描いた私本人もわけがわからないんだけどね。私の絵の前に座り込んで、わんわん泣きながら生い立ちを話しだす人がけっこういるのよ。あと、絵からエネルギーが出てるのが見える』なんてこと言う人もいたのよね」

こう言って彼女は子供のように無邪気に笑った。

アメリカ・ロサンゼルス在住の画家・福田ゆきさん(69)。過去に大きな受賞歴があるわけでもない。メディアに大々的に取り上げられたこともない。画壇では、ほぼ無名な存在。**ところが、そんな彼女と彼女の作品が、なぜかいま、女性を中心に多くの人から脚光を浴びている。大手百貨店の新宿髙島屋や、若者に人気のセレクトショップ・ビームスなど、有名企業が彼女の展覧会のためスペースを提供しているのだ。**そして、そこを訪れた人たちは、冒頭のコメントにあるとおり、不思議な体験をし、癒されているという。**ある50代の女性は、福田さんの絵から「亡くなった母の声が聞こえ、それまで持っていた母へのわだかまりが消えた」と話した。また、ある30代の女性は「ゆきさんの絵や、ゆきさんご本人と接していると、そのままのあなたでいいんだよ」と言ってもらえているような気がする」と、癒しの効果を証言してくれた。**

福田さん本人にそのことを聞くと、彼女は相変わらずいたずらっ子のような笑みを浮かべたまま、早口でこうまくし立てた。

「それは私の画力じゃなくて、ネイティブアメリカンの力なんじゃないかな。私自身がそれによって変われたというか、救われた経験があるからそう思うんだけどね」

福田さんの作品のほとんどは、アメリカの先住民であるネイティブアメリカンと、彼らの先祖が遺した壁画がモチーフになっている。じつは福田さんは30年以上も前から、アメリカ南西部にあるアメリカ最大のネイティブアメリカン居留地「ナバホ・ネイション」で彼らとともに生活。そこで得たインスピレーションをスケッチブックやキャンバスに描き込んできた。それらの絵がいま、日本人の心に、不思議な癒しと力を与えているのだ。

ナバホの小学校を訪問。日本の手ぬぐいを子供たちに。日本文化を伝えるのも福田さんの〝役目〟

電気も水道もないナバホの家を見てなんとかしてあげたいと思った

1940年、東京・青梅に生まれた福田さんがアメリカに渡ったのは、33歳のとき。

「当時私はロウを使った染め物、ロウケツ染めをやってたの。それであるとき、友人にカナダに行かないかって誘われたの。あのころのカナダは技術者には比較的簡単に永住権をくれたから。同時期に染め物の本場・京都に修業に行くことも考えてたけど。外国を見たいって気持ちが強かったんだよね。結局染めの道具を全部ロスに送ったの」

当時、アメリカには外国人移住者向けの無料の英語学校があった。福田さんは、いったんロスに立ち寄り、英語を習得した後、カナダに向かおうと考えた。ところが……。

「英語学校にネイティブアメリカンのことが大好きな白人の先生がいたの。その先生が卒業前に、アメリカ南西部にキャンプに連れていってくれたのよ」

ここで福田さんは、その後一生関わることになる「ナバホ・ネイション」に、はじめて足を踏み入れたのだ。

「そのとき、すごいショックを受けたの。だって、当時の日本人からしたら、アメリカ＝繁栄っていうイメージしかなかったでしょ。それが、ドアをもう1つ開けて居留地の中を見たら、裸足で走り回っ

福田さんの日本での展覧会は、来年3月23日から。東京・銀座教会・東京福音会センターで

3歳、七五三で。この当時から紙とクレヨンを持たせておけばおとなしい子だったという

てる子供がいて、電気も水道もない家が多くて。洋服にしろ食べ物にしろ、本当にみな粗末で。いまでこそ居留地内にスーパーはあるけど、当時はそんなものいっさいないし。『え、ここアメリカ？　ここに人間住めるの？』って」

そのとき、福田さんのなかで、ある気持ちが芽生えた。

「いま思うとね、ホントにおこがましいんだけど。なんとかしてあげたいって思ったんだよね。私がこの貧しいナバホの人たちを救いたい、って」

そんな彼女の思いが通じたのか、英語学校修了後、カナダ行きの話は頓挫。福田さんはいったん日本に帰国し、ビザを切り替え再びロスに。そこで高校の卒業資格を取得し、彼女が選んだ進学先が、ナバホ・ネイションの中にある『ナバホ・コミュニティ・カレッジ』（現在は『ディネ・カレッジ』に改名）だった。それにしても。ネイティブアメリカン居留地の学校に、外国人留学生なんていたのだろうか。

ナバホ・ネイションのデルコンズの町のインディアンフェス会場で。伝統的衣装の子供たちと

「いないわよ（笑）。カレッジ始まって以来の外国人……いや、数人、カナダのネイティブアメリカンの子が通ってたけどね。基本的には、ネイティブアメリカンの子ばっかりよ。それでね、同級生たちから最初に聞かれたの。『ウィッチ・トライブ？（どこの部族？）』って。私はすっとぼけて『トーキョー・トライブよ』なんて答えてね。言われたほうはキョトンとしてたけどね（笑）」

カレッジではナバホ族をはじめとしたネイティブアメリカンの歴史と文化を徹底的に学んだ。彫金や陶芸、銀細工にインディアン・モカシン製作……福田さんの毎日はとても充実していたという。

「エブリデイ・イズ・ニューデイって感じ。本当に面白かったわね。友人もたくさんできたしね。寮では、リタって

いうルームメイトがいて。週末になると彼女が実家によく招いてくれたの。カレッジから3時間ぐらいの野原のなかの一軒家。お父さんが自分で建てた家だった。プロパンを運び込んでるからガスストーブだけはあるけど、水道はなし。水は遠くから汲んでくるのね。だから、朝だってコップ1杯の水で歯を磨いて、顔をちょこっと湿らせておしまい。シャワーなんか、あるわけないじゃない。そこで週末を過ごしてカレッジに戻るときに、リタが面白がって言うの。『ゆき、ユー・ビカム・ナバホ（あなたもナバホになったわね）』って。私が『ホワイ？』って聞くと『ユー・スメル（あなた、臭いわよ）』って（笑）」

水の大切さを、身をもって痛感しはじめたころ、福田さんは授業でさらに、カルチャーショックを受ける。ネイテ

中学時代はテニス部に所属。学校では人気者で男女分け隔てなく友達は多かったという

荒野のなかオニギリをパクつく福田さん。「ナバホで梅干しオニギリ……サイコー！（笑）」

イブアメリカンの社会には「メディスンマン」と呼ばれる、医師と祈禱師の役割を兼ね備えたような、住民から絶大な信頼を寄せられる人たちがいる。カレッジ在学中、福田さんはあるメディスンマンが受け持つクラスを受講していた。

「ある日、その先生から『生きるために必要な4つのものはなんだ？』って質問されたのよ。それで私は『お金でしょ、ビザでしょ、パスポートでしょ、あとは何かな……』って具合に答えたの。だって、留学生にはどれも大切なものだからね。でも、先生は『それはぜんぜん違うよ』って。『答えは太陽、空気、水、それに大地だ』って。それ聞いて？　私はなんだかアッパーカットでも顔面に食らったような気分だった。目から鱗じゃないけれどね。『ああ、そうだ！』って。お金なんて答えた自分が恥ずかしく思えた。でもね、同じことを東京やロスで言われたとしても、心から理解はできなかったと思う。あの厳しい大自然のナバホの地で聞いたから、心に響いたんだと思う」

時間に遅れても、「来るときは来るから」神経質な性格が壊れおおらかに

渡米前の、いやナバホ・ネイションに足を踏み入れる前の福田さんは、どちらかというと潔癖な性格だった。そんな彼女の幼少期を、4歳下の妹・洋子さんは昨日のことのように覚えている。

「姉はものすごくきれい好きな人でした。それはもう神経質なほど。畳の縁に溜まったホコリを爪楊枝で掘り出しながら掃除するような人でしたから。本棚とか机の上のものとかも、キチッと並んでないと許せないんでしょう。ちょっとでも動かしておくと『ちゃんと戻して！』って、よく怒鳴られたものです」（洋子さん）

当時のことを福田さんにも振り返ってもらった。

「あのころの私のあだ名は『座敷豚』。家のなかをブーブー文句ばかり言っては掃除してたから。それぐらい神経質な子供だったの。でも、子供ながらにわかってた。自分のこの性格では将来、生きていくことに苦労するだろうなって」

その神経質で繊細な性格は、彼女の予想どおり、その後の彼女を苦しめた。高校時代、進学について悩んでいた福田さん。義理の兄（お姉さんのご主人）から「まず自分がどういう人間かを考えたほうがいいよ」とアドバイスされたことで、高校生の福田さんは考え込んでしまったのだ。

「いちばん多感な時期でしょ。考えすぎて、何がなんだかわからなくなっちゃったのよ。自分はいったいなんのために生まれてきたのか、生きていくのがいやになって。気持ちがどんどん落ち込んじゃってね。この先もこんなに苦しいなら、もう死んでもいいやと思った。電車に飛び込むか、ガスにしようか、とまで考えた。藁にもすがる思いで本をたくさん読んだし、いろんな人に相談もして、やっと死ぬことを踏みとどまって……」

それほど繊細だった福田さんが、ナバホでの暮らしで変わった。カレッジの卒業式、和装で出席したいと考えた福田さんの要望で、日本から着物持参で駆けつけた洋子さんは、姉の変化に驚愕した。

「あれほどきれい好きだった姉が、地べたにそのまま座ったんですよ。それには本当に驚いた。あと、待ち合わせとかもね。ナバホの人との待ち合わせで、時間になっても相手がなかなか来なくてね。私がイライラしてたら『来るときは来るから』って。昔の姉からは想像もできないぐらい、おおらかな性格になってましたね」（洋子さん）

そんな妹さんの証言を福田さんに伝えると「ただただ生きるという大前提のもとでは、神経質な性格なんて壊れちゃうのよ」と笑った。

「だって、夏の間、ナバホの人たちは羊を追って山間の家に引っ越すんだけど。そこに泊まりにいくじゃない。一応寝間着も持参したけど、それどころじゃないの。もうジーパンのままでも汚れるんじゃないか、と気になるほどの寝床。すごく臭いし。最初は『え、ホントにここで寝るの？』って思ったよ。そういうの経験したらね、神経質なことなんて言ってられなくなる。だって、寝られないなら

卒業後、4年ほど暮らした小屋は電気も水道もなし。「日本の友人が来たことある。皆、ヒーヒー言って音を上げてた（笑）」

100万円の値がついた福田さんの絵が購入者と母とのわだかまりを消して

ナバホでの生活をとおして、自分の生きる道を絵に定めた福田さんは、自分の人生観を変えたナバホの人々の暮らしを描き続けた。17年前からは日本でも展覧会を開くようになった。そして、その会場では冒頭で紹介したような不思議な現象が次々起きたという。

「高島屋の個展のときかな。ぜんぜん知らない女性が突然会場に来て『ここすごいわね』って。聞いたら1階から上を見上げたら、昼間だというのに会場のある10階が光に包まれて見えたんですって。それで光の源を探してきたらこの会場だったと言うのよ」

ほかには「絵から太鼓の音が聞こえた」という人も。そして極めつきは、本稿冒頭に登場した50代の女性だろう。複雑な家庭で育ち、幼いころから母親の愛情を感じることができなかった、と泣きながら福田さんに思いの丈をぶつけたという。

「晩年の母と一緒に暮らしたんですが、幼いときのことがしこりとなって、心を開けないまま先立たれて。ずっとわだかまりを抱えていたんです。そうしたら、福田さんのその絵から、母親の声が聞こえたんです。おかげでそのわだかまりを消すことができたんです」(50代女性)

彼女は100万円という値がついたネイティブアメリカンの横顔の絵を購入。福田さんはそのときのことを鮮明に覚えている。

「『私、買います』って言われて。でも、値段が値段でしょ。寝なきゃいいのよ。寝なきゃ死ぬのよ。食べなきゃ死ぬのよ。好きにすればって。そんな感じよ」

バーナさんの父でインディアンアートの大家・ハリソンさんと。曾孫のノーリ君

「老後は一緒に暮らすわよ」(バーナさん)。「あら、嬉しいこと言ってくれる」(福田さん)

「ナバホの厳しい自然のなかの暮らしをとおして、私の感謝の心は深くなったと思う」

自分の絵なのに私のほうが恐縮しちゃって『買わなくていいんじゃない、無理しないで』って言っちゃった。それでも彼女は『絵が自分を呼んでるから』って買ってくれた。ホント、恐縮しちゃったわ」

今回、本誌記者は福田さん本人の案内のもと、ナバホ・ネイションをまわった。現地滞在わずか数日の強行軍だったが、1人の女性の人生をそれほどまでに変えた大地を、肌で感じてみたかったのだ。

ロスから列車とクルマを乗り継ぎおよそ15時間。居留地北部の町・カヤンタに辿り着いた。景勝地・モニュメントバレー観光の拠点となる町。ここに、福田さんのカレッジ時代の親友・ジェネビーさん(52)が暮らしている。

「彼女は、とても優しい人なの。学校でも私のことをいつも気にかけてくれてた。週末とか、私が1人ぼっちになりそうだな、と思うと必ず声かけてくれたのよね」

そんなジェネビーさんが営むレストランを訪ねる。旧友の顔を見つけるなり、福田さんは大声をあげた。

「ヤーテ!」

これはナバホ語の「ハロー」。声をかけられたジェネビーさんは嬉しそうに、でも少し照れくさそうに小声で「ヤーテ」と返した。

「ナバホの人って日本人にす

ごく似てるでしょ。顔立ちもそうだけど、すごくシャイなところも似てるのよ」

ジェネビーさんをハグする福田さん。こうなると、どちらがナバホ族だか見分けがつかない。でも、学生時代のジェネビーさんは、福田さんが外国人だとすぐにわかったと言う。

「だって、ゆきは英語が下手だったからね(笑)。でも、彼女はカレッジに通ううち、あっという間にナバホの人間になった。陶芸も歌も、なんでもナバホ族以上にできるようになったからね。唯一できなかったのはナバホのボーイフレンドぐらいじゃない(笑)」

次いで訪ねたのは、カレッジ卒業を間近に控えた福田さんが、寮を出て暮らした部屋のすぐ隣に住んでいたバーナさん(58)。ツェイリーという町の小学校の教師をしている彼女。福田さんは彼女とすぐに打ち解けたという。

「一言でゆきを紹介するなら、『ナバホの女』よ。だって、思考回路が私と一緒だもの。前世は間違いなく私と姉妹だったと思うわ。だからね、ゆきは日本からナバホに来たんじゃないの。ナバホに帰ってきたのよ」(バーナさん)

ケンカするほど仲がいいと言うが、それほど密な関係を築いてきた2人にもめ事はなかったのだろうか? 福田さんが「1度だけ険悪になったことがある」と教えてくれた。

「10年ぐらい前かな、ナバホの人たちを日本にお連れしようってときにね。航空券の支払い期日が迫ってるのに、いくら催促しても送金してこない人がいたの。旅行社が連絡したら『牛が売れたら払う』とか悠長なこと言ってたんだって。それで、私はナバホ側の幹事をしてたバーナに手紙を出したの。そのころ彼女の家は電話もなかったからね。『コレクトコールでいいから私に電話して』って。でも、待てど暮らせど電話がこない。しびれを切らして私、ロスからクルマ飛ばして行ったわよ。深夜、彼女の家に辿り着いて。『どうして電話くれないの!?』って問い質したら『あなたが来るとわかってたから』って。もう気が抜けちゃってケンカどころじゃなかった(笑)」

じつは福田さんは、絵を描くかたわら、旅行のアテンドもボランティアで行っている。ナバホの人たちから希望者を募り日本に連れていって日本文化を体験してもらったり、日本からの希望者を引き連れ、ナバホを案内したり。すべて無償で行っているのだ。

「昔ね、バーナと2人で、あるメディスンマンに見てもらったとき、その人が言ったの。『お前たちは将来、ナバホと日本の懸け橋になる』って。それをいま実践してるのよ」

瞑想の儀式「スウェットロッジ」に入る直前。儀式を取り仕切るリーダーからそこで使うタバコを渡される

カレッジ時代からの親友・ジェネビーさんと。「ゆきは正しい道を歩んでると思うよ」(ジェネビーさん)

「Bギャラリー」の藤木さん。福田さんは2007年に、同所で展覧会を開催。大盛況に終わった

それにしても、居留地のなかの自然は聞きしに勝る厳しさ。日中はジリジリと真夏のような太陽が照りつけ日向は30度を優に超す。ところがひとたび日が沈むと一気に気温は零度近くに。ひっきりなしに吹き付ける強い風。極度に乾燥した大地では常に喉が渇き、ペットボトルの水が、あっという間に空になる。なるほど、あのメディスンマンの言葉――生きるために大切なのは「太陽、空気、水、そして大地」という言葉があの日、福田さんの心にストンと落ちたのも理解できる。

「私がこっちに来たころ、ちょうど日本は高度経済成長の余韻があって。でも、私は漠然と思ってた。**物質的に豊かになりながら、日本は何か大切なものをなくしてるんじゃないかなって。それが何なのか、そのときはわからなかったけど。いま思えば、その大**

デルコンズでのフェスティバル。メインイベントの1つが、このロデオ大会

切なものが、ここナバホにはたくさん残ってるのよね。私はここで、日本にいたころなら、あって当たり前と思っていたすべての物事に感謝することを教えられたのよ」

自分を偽って生きてきた人間ほど福田さんの絵や言葉に癒される

日本で福田さんの個展を開催したビームス"Bギャラリー"の藤木洋介さんの言葉を思い出した。福田さんの作品が現代の日本でウケる理由を、彼は次のように分析した。

「福田さんと接すると、涙を流す人がすごく多いんです。福田さんって、とくに新しいことを言ってるわけじゃないんです。すごくシンプルで根源的な、人間の原点みたいなことだけ。それが、ぼくら現代人に何かを思い出させ、本質を突いてくるんだと思う。だから、彼女には、ほかでは言えない悩みを打ち明けられる。本当の自分を出せず自分を偽って生きてきた人ほど、福田さんの絵や彼女の言葉に触れて感動し、癒されるんだと思います」(藤木さん)

旅の終わりに、福田さんは作品の大切なモチーフになっている壁画を案内してくれた。場所はナバホ・ネイションの真ん中にある、ナバホ族とはまた違った部族、ホピ族が住む居留地内部。標高数百メートルの巨大な台地の上に、その壁画は無造作にあった。

「4千年前のこの壁画は、現代の私たちが置かれた状況を予言したものといわれてる。お金やものがすべてという現代、いろんな意味で不安定になってしまった人類に、この先、変わることを、もう一度原点に立ち戻ることを促しているんじゃないかと思う」

強い風に吹かれながら、福田さんは言葉を続けた。

「ネイティブアメリカンの社会ではね、すべての人はもちろん、地球上のあらゆるものを同列に扱う。大地は母、空は父、樹木はスタンディングピープル、岩はロックピープルというように。不要なものなど地球上には何もなくて、すべては1つなんだと。それら万物の調和があって、はじめて地球には平和がもたらされるっていう考え方なの。いま、もし私の絵にニーズがあるんだとしたら、それはあの壁画の予言の、その時期がきたからかなと思う」

どこまでも続く直線道路で。「ここが私の魂の故郷、ナバホ・ネイションです！」

取材・文／仲本剛、撮影／小原里美

4千年の時を経て届けられた、現代人の心を動かす「インディアン・アート」カードの力

「アトリエを見たい？　貧乏絵描きなんだからさ。自宅のコタツで描いてるのよ（笑）」（福田さん）

「これが、予言の壁画です。トロッコみたいに見えるけど、4千年前のものだから、そんなわけなくて……いちばん左の車輪みたいな輪が第一次世界大戦、その隣の輪が第二次大戦を表してるっていわれてます。だから、いまはちょうどこのあたりかな……」

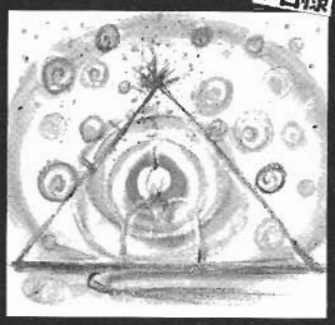
そう言って、ナバホ族やホピ族の先祖と言われているアナサジの壁画を指し示し、説明する福田さん。彼女によれば「いま、現在こそが、人間は変わるチャンス」と言う。「お金やものがすべてという心を捨て、万物に感謝する気持ちを皆が持てたら。地球には永遠の平和が訪れるはず」

福田さんの絵を飾るだけで「とても癒される」と話す人が多数いる。また、ある高名なメディスンマンは、彼女の作品を見て「壁画を彫った人たちが手を叩いて喜んでる姿が見えた」と評した。

「私自身は霊感とかない人だから。そう言われても『まさか～？』って思うぐらいなんだけど。でも、描くときは『アナサジの神様、描かせてもらいます。よろしくお願いします』と祈りを捧げてる。絵に不思議な力があるとしたら、それはネイティブアメリカンの神様の力だと思う」

左のカードの1枚を飾るだけ、持ち歩くだけで、悠久のネイティブアメリカンのエネルギーが、あなたに届きます。

1名様 宇宙の力が宿るティピの絵をプレゼント



特別に福田さん直筆水彩画を1名様にプレゼントします。「このネイティブアメリカンのテント『ティピ』も私の大切なモチーフ。感覚の鋭い人からは、この中に『宇宙のエネルギーが充満してる』って言われます」（福田さん）そのパワーをぜひ実感して。

応募方法●郵便はがきに〒住所、氏名、年齢、職業、電話番号、「インディアン・アート」希望と明記し、左下の応募券を貼って（コピー不可）応募してください。〒112-8011文京区音羽1-16-6女性自身2420号「ナバホ係」まで。締切りは11月20日（金）当日消印有効。正解者多数の場合は抽選。賞品の発送をもって当選者発表に代えさせていただきます。

#2420 ナバホプレゼント 応募券

●雑誌公正競争規約の定めにより、この懸賞に当選された方はこの号のほかの懸賞に入選できない場合があります。当編集部へ直接ご応募いただく応募はがきに関しまして、ご応募された懸賞の抽選および賞品の発送にのみ使用させていただきます。そのほかの目的には使用いたしません。※当選賞品の権利の譲渡、および換金はお断りいたします